

私にも
言わせて!
第109回

フツターのウルトラセブンファンだった
僕が転生したら公衆衛生医師だった件



群馬県桐生保健福祉事務所(兼)
吾妻保健福祉事務所 部長
鈴木 雄介

平成19年群馬大学卒業。初期臨床研修後、21年、群馬大学精神科神経科に入局。精神科医として群馬大学医学部附属病院、群馬県立精神医療センターなどに勤務。30年4月、群馬県に公衆衛生医として入庁。令和3年4月から現職。

令和4年、明けましておめでとございます。「群馬県の自慢など自由に書いてください」と言われたのですが、全然関係ない内容になってしまい、われながら驚きました。本文で触れられなかった郷土の自慢をここにします。群馬で道に迷っても、都庁に次いで背が高い県庁舎と、富士山の次に裾野が広い赤城山を目印にすれば方角が分かります。凄〜!

狙われた街

「ウルトラセブン」第8話「狙われた街」は、今でも特撮史上に残る名作といわれる作品の一つです。ちやぶ台を挟んで対峙するモロボシダンとメトロン星人や、夕日をバックにした美しい戦闘シーンなども語り草ですが「たばこの中に人間を狂わせる赤い結晶体を仕込み、それを吸った人間が急な行動変容を起こすことで、人間同士の信頼感を損なわせる」というストーリーの完成度が、今でも多くの人に評価されています。現在のお笑い界

の重鎮であるダウンタウンの松本人志と爆笑問題の太田光の二人がともにこの話に強い感銘を受けているのも面白いところです。

「ウルトラセブン」の本放送があった昭和42年の男性の喫煙率は、82・3%。ほとんどの成人男性がたばこをたしなんでいたと言っても過言ではありません。電車の車内や、会社のオフィス、学校の職員室すらほとんど喫煙フリー。そんな時代だったのでしょう。たばこが健康に害を及ぼすなんてほとんどの人が想像もしていなかったのだと思います。

して、正しい自己決定の方法を啓蒙するために学校の授業を日夜工夫していらつしやる先生…。

前述したように、たばこ対策というものは一つの課題を解決しても、また次の課題が生まれてしまう。まさに「血を吐きながら続ける悲しい馬拉ソン」のようなもの。しかし、いろいろな立場から、一歩でも前に進むために闘い続けている人たちがこんなにいるという感動。公衆衛生医として仕事をして1年がたち、日々はルーチンワークで仕事が終わるかもしれないと思っていた自分の考えの小ささを反省し、自分の希望やアイデア(ある意味妄想?)次第で、どんどん新しいアプローチができるという面白さを仕事に見いだせるようになりました。そして、それはたばこ対策に限らず、公衆衛生というフィールドのあらゆる仕事に共通していると考えるようになりました。

史上最大の侵略

冒頭で触れたウルトラセブンは、「エヴァンゲリオン」の庵野秀明監督をはじめとした多くの現代のクリエイターたちに影響を与え続け

それから時は流れて、現在では多くの人がたばこは有害ということを認識しています。成人男性の喫煙率も30%を下回り、一昨年度からの健康増進法の改正により飲食店や事業所でも原則禁煙となりました。しかし、それでもなお、喫煙所が減ったことによる路上喫煙や、COVID-19の喫煙所での感染、加熱式たばこに代表される新種の台頭等、たばこがいまだに多くの問題を抱えていることを、保健所で働いていると感じざるを得ません。そんなたばこ問題を昭和の時代に物語の要素としていたウルトラセブン制作陣の感覚の鋭さが、この作品がいまだに高い評価を得ている理由の一つなのでしょう。

超兵器R1号

私は入庁して2年目に、国立保健医療科学院で「たばこ対策の施

のプライベートや家庭を犠牲にして新型コロナウイルス対策に取り組んでくれた所員の皆さんには頭が下がる思いでした。しかし、一部の人間の犠牲と、やりがいという名の押し付けのもとに成り立つ医療行政は決して健全なものではないですし、それは患者さんの不利益にもつながってしまうことです。ウルトラセブンの最終回で、キリヤマ隊長は「地球はわれわれ人類の手で守らねばならない」と言っているのと同じように思いました。これは「セブン1人に頼ってはいけません」というキリヤマの決意です。われわれも、誰かの犠牲的な献身によつてではなく、協力と英知によつて保健行政を進めていかななくてはならないのです。

日本人の悪い癖は「喉元過ぎると、何となくうまくいった感じにしてしまう」ところです。この文章を書いている2021年11月現在、新型コロナウイルス感染症は一段落しています。しかし、今後、また感染拡大はやってくるかもしれませんし、新型コロナウイルス以外の新規感染症や災害も近い将来やってくるでしょう。今こそ、い

設推進における企画・調整のための研修を受講させていただきまし。それまで私は、たばこ対策について「どうせニコチン依存の人に言ってもムダだよ」とどこか思っていました。実際、臨床医時代の私とたばこ対策の関わりは、患者さんに「禁煙してみては?」とたまに伝える程度。当然ほとんど成功しません。しかしこの講習を受けたことで私の中で「革命」が起きた。それは、日本の先頭で対策に当たっている人たちの情熱と工夫によつてもたらされました。全国津々浦々の企業や機関の喫煙所に自ら乗り込み、まさにフィールドワークのように実態調査し、それに基づいた啓蒙活動を施して日本の産業と闘い続けている先生、たばこ対策を「健康増進のためのまちづくり」の一環として捉え、対策を起点としたまちおこしを考える先生、たばこ対策を「きっかけ」と

かに無理なく迅速に新しい危機を迎え撃つ体制をつくれるかを考えていかななくてはなりません。また、保健所は平時の業務においても非効率的なことはいまだに多く、時には科学的な事実を無視した過去の慣習や、権威者の一声に盲目的に従っていることがある印象を受けます。皆が気持ちよく働いて、地域の役に立つ職場づくりのためにもこれからは声を上げていこうと思います。

最後に、人生に迷っていた私を拾ってください、また、私が体調を崩し病休中も温かく待ってください。さつた群馬県職員の皆さまと、突然の転職にも温かく送り出してくださった群馬大学精神科神経科関係者の皆さま、私の趣味への理解を今のところ示してくれている家族に感謝を述べまして、ペンを(実際にはキーボードを)置かせていただきます。ありがとうございました。